

---

---

## 《シエナの聖カタリナの神秘の結婚》の図像に関する一考察

—ジョヴァンニ・ディ・パオロ作品を出発点として—

坂本真惟（北海道大学）

---

---

14世紀イタリアで活躍したシエナの聖カタリナは、数多くの幻視を体験したが、その中で重要なものの一つが「神秘の結婚」である。「神秘の結婚」は、シエナの聖カタリナがキリストと結婚し、指輪を受け取るというエピソードで、この体験は彼女自身が憧れていたアレクサンドリアの聖カタリナの「神秘の結婚」を描いた絵画作品に影響を受けたことが知られている。実際、2人の聖カタリナの「神秘の結婚」の図像は、類似したものが多いように思われる。しかしミラード・ミースは、《シエナの聖カタリナの神秘の結婚》の最初期の作品が、聖女の公式の伝記であるライモンド・ダ・カプア著『大伝説』の記述をもとにした図像（以下「成人のキリストと結婚する図像」）であると指摘している。ミースは、この図像がピサの逸名画家の作品に初めて現れた後、ジョヴァンニ・ディ・パオロによって踏襲されていることを示しているが、作品の詳細な検討は行っていない。

そこで本発表は、「成人のキリストと結婚する図像」における聖カタリナの表現の変遷をたどり、そこからシエナの聖カタリナが聖母に重ね合わされるという、聖女に対する信仰の変化を捉えることを目的とする。まずジョヴァンニ・ディ・パオロの作品（1461-64年）を取り上げ、そこで示されたシエナの聖カタリナの在り方について考察する。本作品は、1460年の列聖後初めて制作された《シエナの聖カタリナ伝》連作の一場面であることから、重要な作品であると位置づけられる。したがって、ここでの構図とモチーフの分析から、シエナの聖カタリナがシエナ市民にどのように捉えられていたか明らかになる。すなわち、シエナの聖カタリナは、幻視者でありながらも、観者と同一シエナに生きた身近な存在として表現されているのである。

次に「成人のキリストと結婚する図像」の作品群の中で、ジョヴァンニ・ディ・パオロ作品以降、16世紀後半に至るまでの聖カタリナの描かれ方の変遷に注目してみたい。例えば15世紀後半のジョヴァンニ・ディ・パオロ作品では、日常的な室内空間に描かれているのに対し、16世紀前半のベッカフーミ作品では、神殿のようなところに描かれている。16世紀後半のリッチョ作品に至っては、聖カタリナはキリストや聖母同様、雲に乗ってさえている。このように時代が進むにつれて、聖カタリナが地上の存在から天上に近い存在へと変化していく。これは、シエナの聖カタリナに対する信仰の変化の表れと捉えることができるだろう。こうした聖カタリナ信仰の変化、いわば信仰の制度化といえる変化は、シエナでの聖母信仰との関連から理解することができる。つまり、ジョヴァンニ・ディ・パオロ作品において、観者に身近な聖人として示されたシエナの聖カタリナは、身近な存在であるにもかかわらず、特にシエナが共和国としての独立を失った1559年以降、シエナの守護者である聖母と重ね合わされるようになったことを指摘したい。